

令和7年度 信濃教育会「学び創造研究会」松本市立開智小学校 開催要項

令和7年度 開智小学校全校研究テーマ

「共に学び合う 子どもと教師 ～わくわくする授業をつくる～」

1 期 日 令和7年10月31日（金）

2 会 場 松本市立開智小学校

3 共同研究者 岩瀬 直樹 先生（軽井沢風越学園校長）

4 日 程

・ 受付（体育館入口） 12：30～12：50

・ 開会式（体育館） 12：50～13：10

主催者挨拶 信濃教育会 研究調査部長 和田 敦 様

学校長挨拶 松本市立開智小学校 学校長 玉水 智香子

研究発表授業説明 松本市立開智小学校 研究主任 伊藤 拓

・ 公開授業

異学年（4・5年）による探究的な学び「中間アウトプット会」 13：20～14：05

・ 授業を語る会（体育館） 14：30～16：30

グループでの対話を軸に、参加者と共同研究者が共につくり共に学び合う会

・ 閉会式（体育館） 16：35～16：45

主催者挨拶 信濃教育会 研究調査部長 和田 敦 様

学校長挨拶 松本市立開智小学校 学校長 玉水 智香子

5 連絡

- ・ 本要綱と資料は各自印刷してご持参ください。
- ・ 受付は体育館入口です。
- ・ 全体会は体育館となります。暖かい服装等、ご準備をお願いします。
- ・ 欠席の場合は、本校までご連絡ください。（0263-32-0006）
- ・ 駐車場は校庭をご利用ください。

授業公開「中間アウトプット会」タイムテーブル

・前半 13:20～13:35 ※時間内の移動は自由

グループ (人数)	授業者	テーマ・内容	会場
光 (39)	4の2担任 江口 友希 音楽専科 金子 初音	光でミュージアム	多目的室
		影絵劇	視聴覚室
		虹づくり	第1理科室
		光でマジック	4-2
		光で遊ぶ（太陽光を使ったおもちゃ、 光でもよう遊び）	4-2 → 4-2 前トイレ
		光でクッキング	校庭
自然 (61)	5の1担任 三澤 勇介 理科専科 志村 俊之	自分たちの力で火起こし	校庭
		女鳥羽川の生態を探れ	5-1 4-3
		きれいな 大きな 泥だんご	5-3
		どこまでも飛べ 紙飛行機	5-2

・移動 13:35～13:40

・中間アウトプット 後半 13:40～13:55

グループ (人数)	授業者	テーマ・内容	会場
食 (26)	5の2担任 北澤 倫美	SWEET と商品開発をしたお菓子販売 ※よろしければご購入ください	図工室 和室
防災 (28)	5の3担任 望月 健生	防災工作 防災食 防災クイズ クッキング 迷路	体育館
交流 (19)	4の1担任 島田 乃葉	これまでの交流をふり返って (幼稚園、1年生、大学生)	第1音楽室
布 (26)	4の3担任 大畑 幸亮	布を使ったお化け屋敷	被服室入口→視聴覚室
		ハンモック テント作り	被服室入口→ベランダ

・ふり回り 13:55～14:05

（参観のお願い） 子どもの発表（アウトプット）に対し、積極的にフィードバック（質問・感想・助言等）を返してください。

私たちと子どもの歩み

1 令和5年度 探究のサイクルを回す

令和5・6年度、県のパイオニア校として丸ノ内中学校・田川小学校と連携し探究的な学びを推進しました。初めは「先ずやってみる」「探究のサイクルを回す」が合言葉でした。

3学年では、社会科で地域を探検し、栄えている商店街とにぎわいをなくしてしまった商店街があることを知り、「松本をもっと盛り上げるにはどうしたらいいか」という問いや、「観光客に松本のことをもっと知ってもらいたい」という願いが生まれ、この2点を学年で取り組む探究の大きなテーマとしました。

この探究のゴールは、自分たちで作ったチラシを駅前、松本城、商店街で観光客や地域の方に配ること。大切にすることは、インターネットの情報だけに頼らずに自分の足で情報を集め自分の言葉で説明することでした。チラシ作りの活動が始まると休日にまで商店街に出向き、店員さんにインタビューをする子どももいました。そしてチラシ配布の時、出会った方々が励ましやアドバイス、「これから行ってみるね」などの温かい言葉を返してくださり、子どもたちも「誰かのためになっている」という実感や、やり甲斐を得ることができました。

2 令和6年度 「子どもに委ねる」探究 異学年縦割りの探究

軽井沢風越学園の先生方と行った研究会で「探究のサイクルの型を意識しすぎること、教師主導の探究になっていないか」という課題が見えたことを機に、前年度の実践を振り返りました。そして全校研究テーマを「自ら探究する子ども」、部会研究テーマ「子どもに委ねる」とし新たに研究をスタートしました。

前年度の「探究のサイクルをまわす」という考え方を継承しつつ、令和6年度はさらに、子どもの願いや思い、そして問いを大切にしたい授業づくりを目指しました。「子どもに委ねる」探究を実現するためには、子ども自身が探究を進めるスキルを身につけること、そして教師が伴走者としてのノウハウを持つことが必要です。本校では、教科の中で探究スキルを育むことを模索し、国語の話し合いの授業を前倒して実施したり、他教科でも話し合いの場面を多く設けたりしました。また、研究会では、具体的な場面をもとに「どんな問いかけが有効か」を考える時間も設けました。

子ども主体の探究を進めるには、教師側の意識改革も不可欠です。そのため、令和6年度の1学期には授業設計研修やチューニング研修など、学習者の視点で体験する研修を多く取り入れました。重点研究会では「先生方と語る」ことを重視し、各学年・学級でどのように総合的な学習が行われているのかを共有することで、職員室内でも「今、総合どんな感じですか？」という会話が自然に見られるようになりました。

令和6年度は、「子どもに委ねるとは何か」を共通の問いとして1年間考え続けてきました。実践を振り返りながら、「問い」「教材」「探究の方法」など、様々な場面で「子どもに委ねる」ことを意識しました。その成果としては、これまで教師主導だった部分を「子どもに委ねる」姿勢が見られるようになったこと、子どもたちも自分のやりたいことを自分なりの方法で発信できるようになったことが挙げられます。

異学年（4・6年生）縦割りの探究では、15以上の多様なテーマに取り組みました。子どもたちの振り返りには、「学び方を学んだ」「調べ方は一つではないことが分かった」「コミュニケーション能力がついた」などの声があり、各グループで力をつける姿が見られました。S児は「昨年度は何をしていたのか分からないまま終わってしまったけれど、今年は好きなことができて楽しかった」と語り、次の探究への意欲も見せていました。また、「6年生が知らないことを4年生が知っていた」「学年が違ふと考え方も違って面白かった」「視野が広がった」といった異学年ならではの学びも生まれました。

3 令和7年度 職員室の日常から

(1) 同僚と「共につくる」研究

令和6年度末、研究部会の中で令和7年度の研究について話し合いました。部会主任が異学年（2学年）による探究的な学びを行うことを提案し、どの学年とどの学年で行うかということを尋ねようとした時のことです。A先生がその言葉を遮るように次のような反対意見を主張しました。「異学年による探究をどの学年で行うべきかということは、その学年を担当する先生の意志で決められないといけない。」この時のA先生の言葉や気持ちを振り返った時、改めて研究課題というものは私たち一人ひとりの存在と切っても切れない関係にあることを感じます。「わたし」はこれまでにどんな歩みを辿ってきたのか。そして、今何に悩み、どんな子どもの姿を願っているのか。そうした「わたし」の問いと向き合うことから、研究を切り離してはなりません。全校研究を進める上でもこうした先生方一人ひとりの問いや考えを大切にしていきたいと思われた出来事でした。

また、先に紹介した研究部会の中でA先生とは違う考えを持つ職員もいました。「学校の研究であれば、同じ方向に向かい協力して研究を進めるべきである」という考えです。既に紹介してきたように、これまでの2年間部会主任のリーダーシップのもと、学びの改革パイオニア校として研究を進め、本校の探究的な学びをつくりあげてきました。令和6年度、新卒で本校に着任したB先生は日々の授業や学級経営に悩みながら、部会主任と共に探究的な学びの実践に挑戦、自分自身の成長と共に子どもの姿が変わっていくことを実感することができたと語っています。

職員一人ひとりが異なる経験年数や多様な考えを持ちながら、それぞれの研究課題や必要性を抱えている中で、全校の職員が同じ方向性を共有し、協力して研究を深めていくためには、どのように研究を推進していけばよいのでしょうか。 私たちはこの問いに向き合い、これまでの研究の歩みを振り返る中で、「共につくる」研究、そして「語り合う」研修ということをいつも真ん中に置き研究を進めることを確かめ合いました。

(2) 「語り合う」研修から研究テーマ設定へ

令和7年度の研究テーマの設定に向け、「これまでの授業」「これから目指す授業」について語り合う職員研修を行い、一例として次のようなことが語られました。

・個性の強い子どもたちと行った総合の実践、子どもが夢中になると個性がよい方向に活かされクラスが変わっていったというC先生の経験。

・楽しくない授業中に、子どもが教室を出て行ってしまったというD先生の苦い経験。等

エピソードの中で特に印象的だったのが、子どもと向き合い、願いを持って挑戦している先生方一人ひとりの様子でした。研修を通し教師の率直な悩みや挑戦にも視点をあてていきたいと考えました（→教師の悩みや挑戦を本時案に記載）。また、先生方との対話から「子どもに委ねる」ことと、教師の支援のどちらも欠かせないということが話題になり、「子どもと教師が共に学び合い共につくる」という授業観が見えてきました。そこで令和7年度以下のように研究テーマを設定しました。



【写真：職員研修の様子】

令和7年度 全校研究テーマ

「共に学び合う 子どもと教師 ～わくわくする授業をつくる～」

4 授業の日常から 共に学び合う子どもと教師の様子

(1) ミシンに夢中になる子どもの姿に立ち止まった大畑先生

「布」グループを担当した大畑先生は、アンカーイベント（導入）として体いっぱい楽しむ布遊びを行いました。子どもたちが布の魅力にひかれ始めていく中で、ミシンでの裁縫にはまっていく子どもたちを見て、大畑先生は思わず立ち止まってしまったと言います。「子どもはミシンを夢中で楽しんでいる。しかしこのままでは個人の『手芸クラブ』のようになってしまわないだろうか・・・」と。そして4・5年の先生に相談しながら、その後の授業を再度構想し直すことになりました。鍵となる学習材は、テント・ハンモック作りでの「布グループの活動に1年生をよんでみたい」というA児の振り返りです。これまで体いっぱい楽しむ布遊びを十分に味わってきた子どもたちは、このA児の言葉から思いを巡らし、「布を使ったイベント（空間）づくり」という新たな展開を大畑先生と共に導き出していきました。そして、裁縫に夢中になっていた子の中にも「布を使ったイベント（空間）づくり」として、ミシンの活用を考え始める子が出てきました。大畑先生から話を聞くと、ミシンに夢中になる子どもたちの姿に立ち止まったのは、「もっと協働的でダイナミックな学びにしたかったから」とのことでした。ここでの大畑先生と子どもたちの様子から、目指す授業や子どもの姿を教師が思い描くことの大切さが改めて見えてきました。



【写真：布グループ ハンモック作り】

(2) ほんものの学びを実現する北澤先生の教材研究

「食」のグループを担当した北澤先生は、アンカーイベントで調理の活動を行いました。そして、「自分でつくったお菓子の販売をしてみたい」という願いが生まれたところから、地域のお店と一緒に調理の活動を行うための教材研究を始めました。何軒ものお店に断られながらも電話や訪問を続け、ついに子どもたちと一緒に商品開発や販売活動することに前向きに取り組んでくれるというお菓子屋「SWEET」と繋がることができました。その直後、子どもたちと共にお店を訪問すると、最高のタイミングでの「SWEET」との出会いが実現しました。地域に飛び出す北澤先生の行動力、教材研究力がほんものの学び、質の高い探究を実現し、子どもの願いを実現する鍵になっています。

5 岩瀬直樹先生との共同研究から アウトプット会について

岩瀬先生との共同研究で、昨年度から行っているアウトプット会について次のように話し合いました。

- ・昨年度の原稿を読む発表方法では、対話によるフィードバックが不十分になりやすい。発表者は対話形式で進め自分の言葉で語ることを大切にする。
- ・年に数回のアウトプット会より、毎日の授業の中で短い発表とフィードバックを重ねることが重要。日常の授業で子どもたちが自分の学びをアウトプットし、対話によるフィードバックを経験することで、学びの根幹が強化される。
- ・従来の「きちんとした原稿を作成する発表」というイメージを改め、対話を通じたフィードバックを重視する方法へと、教師の意識を変える必要がある。

自分の言葉で語ることで、子どもたちはその方法に到るまでのプロセスやエピソードを言語化し、他者からの「フィードバック」を得ながら自分の経験を学びとして再構成します。「アウトプット」の完成度を高めることに力点を置くのではなく、その子にとっての経験や学びを自分の言葉で語ることを大切にします。また、「アウトプット」や「フィードバック」の日常的な取り組みを重視することで、子どもたちが互いの探究に関心を寄せ合う関係を築くことにも重要な意義があります。学び創造研究会で公開する「中間アウトプット会」では、参加者の皆さんに子どもとの対話や「フィードバック」をお願いする予定です。参加者の皆さんも体験的に「フィードバック」を学ぶ場、そして子どもたちの姿から探究的な学びについて、共に考える場になればと思います。



【写真：R6 アウトプット会】

6 令和7年度 研究・研修の概要

月	内容
4月	7日 研究出発の会 14日 職員研修 素材研究
5月	2日 職員研修 研究テーマ検討、素材研究 7日 職員研修 チューニング① 年間計画の作成について
7月	14日 岩瀬直樹先生との共同研究① 16日 職員研修 教科で深める探究的な学びについて 担当堀内主事 24日 職員研修 選べる体験研修
8月	20日 岩瀬直樹先生との共同研究② 25日 職員研修 アウトプット会と指導案について
9月	10日(水) 事前授業公開 職員研修 事前授業を語る会 担当岩瀬直樹先生 岩瀬直樹先生との共同研究③ 14日(火) 職員研修 チューニング②（学び創造研究会本時案）
10月	14日(火) 職員研修 チューニング③（学び創造研究会本時案） 31日 開智探究の日・学び創造研究会 中間アウトプット会 21日 岩瀬直樹先生との共同研究④
11月	10日 開智探究の日・学び創造研究会振り返り
12月	2日 4・5年アウトプット会（保護者） 10日 4・5年アウトプット会（校内） 期日未定 6年、3年のアウトプット会
2月	2日 職員研修 探究振り返りの会

※月2回、月曜日の重点研究で授業の検討や打ち合わせを行う。

7 異学年（4・5年）縦割りの探究 年間計画とアンカーイベントの内容

日にち	時数	共通の内容	交流グループ	光グループ	自然グループ	食グループ	布グループ	防災グループ
5／14～	2	オリエンテーション グループ分け	一年生と遊ぶ	光のひみつ探り隊① 学校の中の光探し	オリエンテーション	おやきを作ろう	オリエンテーション	オリエンテーション
5／21	2	アンカー イベント	聖テレジア幼稚園へ 行こう①	光のひみつ探り隊② 学校の外の光探し	どろだんご作り	これから何を やりたいかな？	布との出会い 何ができるかな？	どんな災害が あるのだろう
6／4	2		一年生と遊ぶ②	影絵遊び	生き物・石・植物探し	マカロン ねりあめを作ろう①	布を裂いてみよう	町の防災設備を 見に行こう①
6／18	2		交流準備	虹をつくる	女鳥羽川生態調査	マカロン ねりあめを作ろう②	布をつなげてみよう①	町の防災設備を 見に行こう②
6／25	2		聖テレジア幼稚園へ 行こう②	太陽の光で チョコフォンデュ①	風を生かした工作	うまくいかない・・・ これからどうする？	布をつなげてみよう② 縫ったり編んだり してみよう	防災食を食べてみよう
7／2	2		交流準備	ステンドグラス作り	昆虫探し	お菓子屋に行って コラボしていただけるか 聞いてみよう	布をつなげてみよう③	パッククッキングで カレー作り
7／9	2		交流準備	太陽の光で チョコフォンデュ②	火起こし	SWEET に行ってみよう	テントハンモックを 作ろう	段ボールベッド体験 地震体験
7／16	2		聖テレジア幼稚園へ 行こう③	光でマジック	テーマ決め	SWEET とコラボしたい アイデアを考えよう	布を染めてみよう	アルミ缶で お湯を沸かそう
8／27	2							
9／3	2							
9／10	2							
10／1	2							
10／15	2							
10／22	2							
10／31	1							
11／5	2							
11／7	4					SWEET で販売		
11／19	2							
11／26	2							
12／2	1							
12／10	1							
12／17	2							

アンカーイベントの中から出た問いや、さらに深く追及したい内容を個人・グループのテーマとして探究する。詳細は、各グループの授業資料参照。

学び創造研究会 光グループ 授業資料

学年：4・5年縦割り 光グループ	授業者：江口 友希、金子 初音
授業時間：13:20～14:05	授業会場：4の2、第1理科室、多目的室
(アウトプットは、13:20～13:35)	視聴覚室、校庭

1 題材名 「わたしと光 ～光を使った〇〇生活～」

2 本時に至るまでの様子と授業者のふり返し

(1) 題材の概要

5月～7月 アンカーイベント（校舎の中・外の光探し、影絵遊び、虹づくり、
チョコレートフォンデュ、ステンドグラスづくり、光でマジック）

7月～ グループ探究開始

(2) 子どもと共に在る

「みなさんにとって、光とは何でしょうか。」で始まった最初の授業。子ども達は思い思いに自分の考えをグループの中で語っていました。ある5年生が、「先生にとって、光とは何？」と尋ねてきました。私は、とっさに「暮らしに必要なものかな。」と答えましたが、私の中に明確な何かがなく、もっと子ども達と同じ目線で考えなくてはいけないと思う瞬間でした。

1学期に全8回のアンカーイベントを行いました。このようなアンカーイベントを仕掛けた理由は、数々の光に関する本を読んだ時に、まず自分がワクワクしたからです。そして、子ども達が笑顔で活動にのめり込む光景が目に見えたからです。アンカーイベントをやってみると、ある子は、楽しそうにどんどんやっていたのですが、別の子は、飽きている姿が見られるなど、子どもによって活動への興味関心の持ち方が様々だということが分かりました。

1学期の最後の開智タイムの中で、「今までのアンカーイベントの中で自分が興味をもったのはどれ？」と尋ねました。すると、子ども達は6つの活動の中から迷うことなく自分がやりたい活動に移動しました。移動後は、自分が興味をもった活動の中でさらに気になることを付箋に書き出していったり、他のグループがどんなことを考えたりしているのかを共有したりしました。そして、自分たちが2学期にどんな活動をしていきたいかどんどんアイディアを書き出していきました。

子ども達の楽しそうな姿に感化され、私も夏休みに「太陽の光で目玉焼きをつくる」ことにチャレンジしました。本にもインターネットにもできると書いてあったので、簡単にできるものだと思っていましたが、実際にやってみると違いました。結論から言うと、焼くことはできるが、食べるには抵抗があるものが出来上がってしまいました。手作りのソーラークッカーを改良して2度目のチャレンジ。焼くのに1時間半以上かかってしまい、やはり食べることはできませんでした。私がうまくできないものを子ども達にやらせてしまってもいいのだろうか、子ども達のやりたいという気持ちを大切にしたいという気持ちの2つの葛藤が起こりました。

2学期になって、子ども達の探究が始まりました。特に太陽の光を使ったクッキンググループは、「お湯を作って、カップラーメンが食べたい、お風呂を作りたい」さらに「目玉焼きを作りたい、プリンを作りたい」などのやりたいことが出てきました。何度か子ども達と一緒に実験を行っていますが成功にはほど遠い状況です。この天候の中で、どのようにすれば短時間で高温にすることができのかが課題です。常に子ども達と共に私も悩んでいます。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】 自分たちのやりたいことを追究してきた子ども達が、今までの活動の様子を自分達の発表の方法でアウトプットすることで、アドバイスや意見をもらったり、逆に参観者に質問したりすることを通して、最後の振り返りの場面で、アドバイスをもらったことや他のグループの様子を参考にして、グループ全員が今後の探究活動の見通しをもつことができる。	
【主な学習活動】 ① 中間アウトプット（発表） 光探し、影絵遊び、虹づくり、光でマジック 光でクッキング、ステンドグラスづくり ② 中間アウトプットの参観とフィードバック 交流グループ、防災グループの参観 ③ 振り返り	【教師の支援（環境設定、学習材、他）】 ・フィードバックをもらう場面で、質問が出にくく、意見交換にならない場合は、教師が質問する。 ・振り返りの場面で、「今後にいかせそうなこと」と「自分の探究の方向と違うこと」を整理し、ホワイトボードや付箋を使って可視化させる。 ・振り返りの場面で似たような内容のグループは、グループ同士をつなげる。
【教師の悩み 見ていただきたい点】 光のグループは、全部で12チームに分かれます。すべてのチームの子ども達がいきいきと活動できるように、どんな支援や声掛けをしていけばよいか日々悩んでいます。 フィードバックでは、ぜひ子ども達に「どうしてそうなったの？」「なぜ、この実験をやっているの？」「今後どうしたいの？」など、光の性質に迫る質問や今後の見通しを持たせる質問をお願いします。	

学び創造研究会 自然グループ 授業資料

授業学級：4・5年縦割り 自然グループ

授業者：5年1組 担任 三澤 勇介

授業時間：13:20～14:05

授業会場：校庭 4-3 5-1 5-2 5-3

(アウトプットは13:20～13:35)

1 題材名 開智の自然を生かして

2 本時に至るまでの様子と授業者のふり返し

(1) 題材の概要

5月～7月：アンカーイベント

(どろだんご作り・自然で見立てる・女鳥羽川生態調査・風を生かした工作・昆虫探し・火起こし)

7月～：自分たちの問い、やりたいこと、伝えたいことを出し合い、話し合う。

(2) 子どもと共に学ぶ

「自然との触れ合いが大好きな子どもたちに、どんな材を与えていくか。」エネルギー溢れる子どもたちを前に悩みました。様々なアンカーイベントを通して、子どもたちは楽しそうに活動しているものの、「何か違う」という思いがしていました。風を使った工作のアンカーイベントをしていた時でした。S児が「オレはこの活動はやらない!」と私の目の前で宣言しました。元々生き物が好きで自然グループに入ったS児。前時、川へ行っていたこともあり、今日も生き物を採れるという思いでいたのでしょう。急にこちらから提示された活動に納得できずにいました。やりたいことをやれる探究の時間なはずなのに・・・私のモヤモヤは膨らんでいきました。

「何か違う」のモヤモヤは、全てのアンカーイベントを終え、これからの活動をどうしていくか、子ども達と考えていた時に解決しました。A児が私を呼び止め「先生、今までやってこなかったこともやってもいいの?」と言いました。私は「もちろんいいよ!」と答えながらも「そうか!」と心の中で叫んでいました。子どもたちに「材を与える」という考え自体が間違っていたのだと気がつきました。子どもたちと一緒に教師も探究していくこと。言葉で理解していた探究が腑に落ちた瞬間でした。

結局のところ、A児は火起こしのチームが楽しそうに感じたようで、火起こしチームに加わりました。しかし、「これをやりたい」と貫き通すS児の思い、「今までやってこなかったこと」にも挑戦しようとしたA児の意欲は大切にしていってあげたいと思いました。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】

アンカーイベントの活動を行い、自分たちで探究していく材を見つけ、活動計画を立てながら動き始めた子どもたちが、参観者の方や仲間に発表しアドバイスをもらう場面で、今までの学習の経過とこれからの見通しをアウトプットすることを通して、自分たちの活動の意義やさらに深める点に気がつくことができる。

【主な学習活動】

- 1 中間アウトプット（発表側）（15分）
- 2 中間アウトプット（参観者側）（15分）
- 3 振り返り（10分）

【教師の支援（環境設定、学習材、他）】

- ・発表する子どもたちに「こんな質問もくるかもしれないよ?」と想定される質問を提示する。
- ・振り返りができるように参観者から出された質問・意見・アドバイスをホワイトボードに記録できるようにしておく。

【教師の悩み 見ていただきたい点】

- ・やってみよう活動大切にしながら、楽しいだけでなく、学びある学習としていくための支援、言葉かけはどうあったらよいか。
- ・「この後どういう活動をしていきたいの?」「開智の周りの自然のために何ができそう?」など今後の活動につながる問いかけやフィードバックをいただけるとありがたいです。

学び創造研究会 食グループ 授業資料

授業学級：4・5年縦割り 食グループ

授業者：5年2組 北澤 倫美

授業時間：13:20～14:05

授業会場：図工室 和室

(アウトプットは13:40～13:55)

1 題材名 「アイディアお菓子で地域を盛り上げよう」

2 本時に至るまでの様子と授業者のふり返し

題材の概要

(1) 題材の概要

5月 「おやき」をみんなで作る。→作ってみたいお菓子「マカロン」「ねりあめ」を作る(2回)

6月 お菓子を作って誰かに売ってみたい。でもどちらも思うようにできない。

7月 自分達とコラボしてくれるお菓子屋さんはないか、みんなで訪問。

9月 SWEETさんとコラボが決定！11月の販売に向けて商品開発。11月7日(金)に販売予定

(2) 「諦め」からの偶然の出会い

「色々な人に自分たちが作ったお菓子を買ってみたい。」と大きな願いをもった子ども達。しかし、現実はその簡単ではありません。一般の方に販売をすることの難しさ、限られた授業時間内にお菓子を大量に作ることの時間的制約、材料費の捻出、衛生面、そもそも人に喜んでもらえるようなお菓子を作れない…。自分達の力だけでは限界があるのを感じ思い悩んでしまった子ども達と私。そこで、コラボしてくれるお菓子屋さんを探してみよう！それがだめだったら子ども食堂や保護者向けの喫茶店はどうだろう？と考え、地域のお菓子屋さんを手あたり次第電話したり訪問したりしました。しかし、思うようにはいきません。そんなとき、ふと偶然目に入った縄手通りの喫茶店 SWEET。中に入って話を聞いてみると、以前にも他校とコラボしてパンを商品開発し販売したことがあるとのこと。そこからトントン拍子で話が進み、みんなの念願だったお菓子のコラボ商品開発と販売ができることになりました。教師も子ども達と一緒にとにかく地域開拓していく。その大切さを学びました。

地域の方への販売活動は、子ども達はもちろん私も初めてです。しかし、限られた授業時間の中で、果たして準備が間に合うのか、今は不安でいっぱいです。子ども達に気づきの視点を与える工夫や、イメージの共有を大切にしながら、自分は伴走者として教師主導にならないよう必死でいるところです。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】販売を来週に控え、準備したことを整えてこれで大丈夫と自信をもったり逆に大丈夫かなと不安に思ったりしている子ども達が、参観者の方にお客さんになってもらい本番同様にお店のリハーサルをする場面で、参観者の方から良かった点や改善点のアドバイスをいただくことを通して、売り子として大切なこと(声の大きさや表情、話す言葉の内容、立ち方等)やたくさんのお客さんに買ってもらうためにはどうしたらよいか(試食、看板の見やすさ、必要な情報等)などに気づくことができる。

【主な学習活動】

- ① 自然グループアウトプット会の参観(15分)
- ② アウトプット会(15分)
- ③ 振り返り(10分)

【教師の支援(環境設定、学習材、他)】

- ・お店の雰囲気や会計のおつりなど、できるだけ本番と同じになるよう準備する。
- ・フィードバックを受けた後の振り返りの場面で、出た感想をみんなで共有できるよう、ホワイトボードに記録していく。

【教師の悩み 見ていただきたい点】

個人探究というよりは全体でのグループ探究になっている「食」グループ。限られた活動時間の中、やる事がたくさんあり、どうしても教師主導になってしまうことが多く悩んでいます。子ども主体になるような教師の適切な支援の仕方についてご意見いただきたいです。

学び創造研究会 防災グループ 授業資料

学年：4・5年縦割り 防災グループ

授業者：望月 健生

授業時間：13:20～14:05

授業会場：体育館

(アウトプットは、13:40～13:55)

1 題材名 「防災グループ 身を守るための方法を知ろう、考えよう、作ろう！」

2 本時に至るまでの様子と授業者のふり返り

(1) 題材の概要

〈5月〉 アンカーイベントをどんなものにしようか考える中で、防災というテーマの中でも様々な視点があると気づきました。例えば、災害の種類について、災害に備えること、災害が起きた時の行動、災害が起きた後の生活などです。子どもたちが様々なジャンルを体験することで、どこかに興味をもつのではないかと考え、アンカーイベントを決めました。

はじめに、私たちが住む町がどのように防災を考えているのかを知るために、町の防災施設を見に行きました。そこで、町の地理的な特徴を踏まえて、起きることが想定される災害を考えたり、災害が起きた時はどこに避難したらよいかを考えたりしました。

〈6・7月〉 地震体験車に乗りました。また、災害が起きた後の生活は避難所で多くの人と限られたもので生活することを話し合い、実際に段ボールベッドを作って横になってみました。他にも、災害が起きても生きる上で欠かせない食は確保しなければいけないことを考え、バッククッキングを行ったり、簡単な工作をしたりしました。

〈8・9月〉 自分が探究したい内容を決めて小グループ分けを行い、探究活動が始まりました。

(2) 子どもと共に学ぶ コンロ作りの失敗から

防災工作でアルミ缶コンロを作った際に、燃料をサラダ油、芯をキッチンペーパーで作りました。はじめは火がついていましたが、時間がたつと火がつかなくなってしまいました。教師が、「なんでだろうね？何がよくなかったんだろう。」と子どもと話し、どこを改善すればよさそうかを考えました。すると、「木なら燃える」と言って子どもたちは次々と割り箸を入れて火をつけはじめました。再び火がついた喜びを共有し合った後、「でも避難所では割り箸は使えないか。」とつぶやく子がいました。教師が工作を改善することばかりを考えていたのに対し、実際の避難を想定して考える子がいたのです。ものの完成度だけではなく、使う時のことを想定する必要性を考えさせられた場面だったと感じます。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】災害が起きた時のことを想定して、避難所の生活を考えて工作をしたり、災害について知ってもらおうと考えたりした子どもたちが、作った工作やクイズなどを他の人に試してもらい、場面で「どうしてこれを作ろうと思ったの？」や「これを知っているとどう役立つ？」と質問をされることを通して、災害が起きた時のことを想定することの必要性や、どんな知識をもっておくことが大事なのかを改めて考え、今後の探究活動への見通しを持つことができる。	
(主な学習活動) 1 光グループのアウトプットを見て、フィードバックを送る（15分） 2 グループを入れ替え、準備する（5分） 3 これまでの総合で作った工作やクイズなどを試してもらい、フィードバックをもらう（15分） 4 もらったフィードバックを踏まえて、今後の探究活動について小グループごとに話し合う（10分）	【教師の支援（環境設定、学習課題、学習材 他）】 ・フィードバックをもらう場面で、質問が出にくい意見交換にならない場合は、担当者が質問するなどフォローをする。 ・フィードバックを受けた後の振り返りの場面で、「生かせそうなこと」と「できないこと」を整理し、今後の自分たちの活動の見通しを持たせるために、ホワイトボードや付箋を使って可視化させる。
【教師の悩み 見ていただきたい点】 ・子どもたちが、実際に災害が起きた時のことを想定して、探究活動に取り組むことができているか見ていただきたいです。 ・「どうしてこれを作ろうと思ったの？」や、「どう役立つ？」といった、災害が起きた時のことを想定できる質問をお願いします。	

学び創造研究会 交流グループ 授業資料

授業学級：4・5年縦割り 交流グループ

授業者：4年1組 担任 島田 乃葉

授業時間：13:20～14:05

授業会場：第1音楽室

(アウトプットは13:40～13:55)

1 題材名 「異年齢交流でつながろう」

2 本時に至るまでの様子と授業者のふり返し

(1) 題材の概要

5月 本校一年生と交流(計2回) 6・7月 聖テレジア幼稚園年長組と交流(計3回)

9月 信州大学生と交流(計1回) 10月 城北地区お年寄りの方と交流(計1回)

(2) 交流とは

「いろいろな人と仲良くなりたい」という思いを抱いてグループを選んだ子が多いこの交流グループ。これまで交流を重ねてきた子どもたちの姿を見ている中で、私は「子どもたちが思う“仲良くなる”ってどういうことなのだろう」と改めて考えていました。

アンカーイベントでは、一年生と交流会を行いました。「遊ぶよ!」と一言伝えただけで、何も計画など立てずに遊んだ一時間は、「楽しかった」「また交流したい」という前向きな振り返りが多かった。はじめは何を話していいかわからず困っていたり、一年生の勢いに圧倒されていたりした子も、二回目の交流会ではだんだん慣れてきて、自分から話しかけている姿が見られました。幼稚園児との交流では、劇、遊び、工作、縁日の4グループに分かれて交流会を計画しました。「園児に喜んでもらいたい」という思いから、それぞれが工夫を凝らして計画していましたが、実際の交流会では時間が足りずに考えていた遊びが出来なかったり、劇グループでは飽きてしまう園児がいて上手いかなかったりと、改善点も見られました。「声が小さかった」「園児が分かるお話をテーマにする」など、反省をもとに、次の交流会に向けて計画しました。そして、年下の子との交流を終えたこの辺りから、「今度は年上の人とも交流したい」という思いが子どもたちの中に出てきました。大学生との交流会ははじめての年上の人との交流でしたが、相手も要領を理解してくれていたため、困ることもあまりなく、子どもたちにとっても楽しく、過ごしやすい時間だったようです。

これまでの交流を終えた子どもたちの振り返りでは、「相手も楽しそうだったし、自分たちも楽しかった!」という感想が多かったです。たしかに交流している時は、相手に合った遊びを考えていたり、相手の目線に合わせて話しかけていたり、「相手に応じた接し方」という点では、自然に考えてできているように感じました。「困ったことや難しかったことはなかった?」と聞いても、「特には…」と答えるように満足感を得ている子が多い一方で、「はじめての交流の時は、相手がどんなものが好きかわからなくて困った」という思いを抱いているA児がいました。その困り感に対し、B児が「相手をよく知ることが大切だと思う」と一言。その時私は、「相手をよく知ること」は「仲良くなること」につながるのではないかと思います。自分から話しかけたり相手が考えていることを想像したりすることは、異年齢はもちろん、同年齢の人間関係を形成していく中でも相手意識をもつことを、交流会活動を通して子どもたちに気づいてほしいと願っています。毎回交流会の振り返りでは、お互いにアドバイスすることがあまりない子どもたちなので、「相手をよく知ることができたか?」「そのために、自分はどのようなアクションを起こせたか?」ということ 키워ワードにして探究の時間を進めていきたいです。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】中間アウトプット会で、これまでの交流会の様子を伝えたり、今後の交流会に向けて「もっと相手に喜んでもらうためにどうしたらよいか」「交流会で困っていること」についてフィードバックを求めたりした子どもたちが、最後の振り返りの場面で、今までは自分たちのイメージで交流計画を立てていたことや、相手のことをよく知らない現状に気づき、「相手をよく知るためにどうしたらよいか」を考えることで次の交流会に向けて前向きな見通しをもつことができる。	
【主な学習活動】 1 中間アウトプット会の参観とフィードバック(15分) 光グループの参観 2 アウトプット(15分) 3 振り返り(10分)	【教師の支援(環境設定、学習材、他)】 ・フィードバックをもらう場面で、質問が出にくく、意見交換にならない場合は、「交流会で困っていること」を参観者に聞いてみるよう促す。 ・振り返りの場面で、「相手をよく知るために」どんな工夫が必要か、可視化できるように付箋を使って振り返りを行う。
【教師の悩み 見ていただきたい点】これまでの交流会で満足感を得ている子どもたちが、「もっと相手に喜んでもらうためにどうしたらよいか」や「困っていることに対するアドバイス」などのフィードバックをもらうことで、今までは自分たちのイメージで交流計画を立てていたことや、相手のことをよく知らない現状に気づき、次の交流会に向けて「もっと○○してみよう」と、相手のことをイメージしながら自分から行動しようとしている姿が見られたか。	

学年：4・5年縦割り 布グループ

授業者：大畑 幸亮

授業時間：13:20～14:05 (アウトプットは13:40～13:55)

授業会場：被服室およびベランダ、視聴覚室

1 題材名 布に魅せられて

2 本時に至るまでの様子 子どもたちの“やりたいこと”が見えてくるまで

布グループは、5月に大量の布地や服に出会うところから始めました。目を輝かせ、布とのふれ合いを思いきり楽しむ子ども達。次時のアンカーイベント「裂く」体験も体全体を使って活動することができました。6月からは「つなげる」体験として、縫ったり編んだりする活動となりました。慣れない裁縫セットの針と糸やミシンを使い、各々がイメージする作品づくりを始めました。時間をかけただけ技術は上達していきましたが、細かい個人作業で子ども達同士の関わりやダイナミックな活動は少なくなり、教師も安全面への配慮とミシンの整備に追われ、これでよいのだろうかと思ひ時間が長く過ぎました。「楽しいという感想は多いが、手芸クラブみたいだ」、「子ども達の考え（どう進みたいのか）が読み取れない」という焦りがありました。7月は、今まで身につけた技術を生かした「大きな作品づくり」に取り組みました。テントチームとハンモックチームに分かれ、皆で布を結んだり縫い合わせたりする作業で久しぶりの協力場面が生まれました。また、「できた作品（場所）を残したい」「一年生をハンモックにのせてあげたい」等のふり返りが多く出されました。布を使って空間を作りだせることを教師が子ども達に教えてもらったように感じるとともに、ダイナミックな活動の楽しさを子ども達も教師も改めて感じる時間となりました。また「染める」活動では、様々な布に触れてきたからこそわかる、素材による染まり方の違いに気づく子もいました。この活動でよいのかと感じていた一ヶ月でしたが、子ども達は教師が思う以上に今までのアンカーイベントから知識や技術を身につけ、次の活動に生かしていることに驚き、一学期を終えました。

二学期は、今までのアンカーイベントをふり返し、これからやってみたいことを尋ねてみました。内向的だと思っていた子ども達から「テントのリベンジ」「もっとマスコットを作る」「布を使ったイベントがしたい」等、たくさんのアイデアが出されたことに驚きました。そして“制作（作品づくり）”と“イベント（空間づくり）”、またその中でさらに小グループに分かれ、やりたいことを進めていくことになりました。自分や自分達のために行ってきたアンカーイベントから、見てもらう・招待する相手を意識しながらの活動に移ってきたこともふり返りやつぶやきから感じられるようになりました。今は、半日総合の日（11月）に低学年を招待して、作品を見てもらったり、ハンモックやお化け屋敷を体験してもらったりしようと準備を進めています。裁縫にも慣れ、作業を任せられるようになってきました。活動での子ども達との対話を多くとり、教師も子ども達とやりたいことを共有しながら、活動を前に進めていきたいと思っています。

3 本時の内容

【願う子どもの姿】次時、低学年を招待してイベントを体験してもらおうと準備を進めている子どもたちが、リハーサルとして他グループに体験してもらい、フィードバック（アドバイスや意見）を受け、よりよいイベントにするためのヒントを得ることができる。

【主な学習活動】

- ① アウトプット会の参観とフィードバック（15分）
- ② アウトプット（15分）
テント・ハンモック・お化け屋敷を中心に
体験してもらい、感想や改善点の意見をもらう。
- ③ ふり返し（10分）

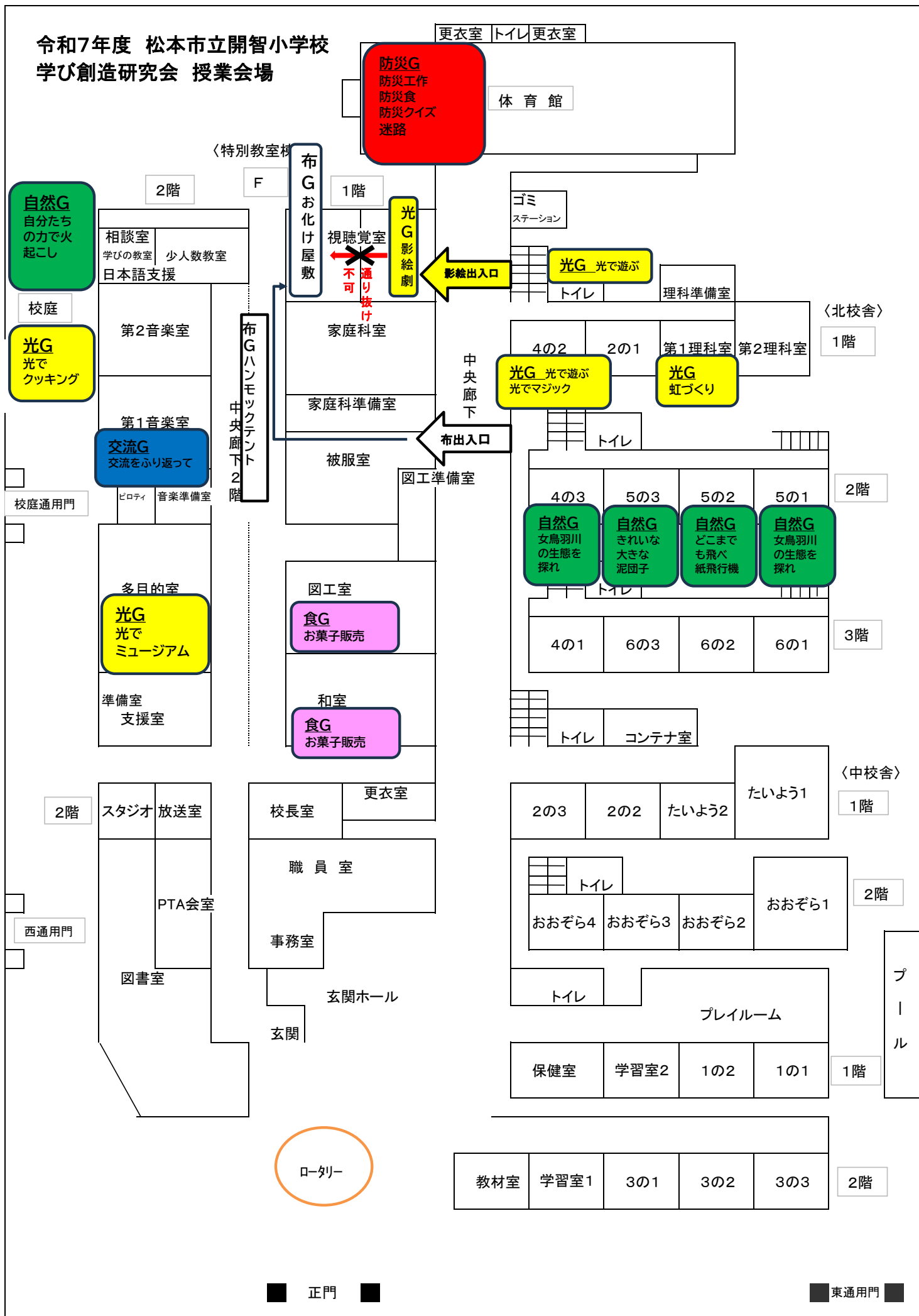
【教師の支援（環境設定、学習材、他）】

- ・布の素材や使い方についてのフィードバックがもらえるように、担当者（ときには参観者）の発表のフォローをする。
- ・ふり返りの場面では、「よかったこと（褒め）」や「生かせそうなこと」を中心に引き上げ、次時への意欲につなげるようにする。

【教師の悩み 見ていただきたい点】

- ・だんだん見えるようになってきた子ども達の“やりたいこと”を教師がどのように支援していくか。子ども達のアイデアを試す・生かすことと教師の支援のバランスに悩みながら進めています。
- ・「布の使い方て工夫したところは？」「布でさらにできそうなことはある？」等、より布に意識が向く質問や「こうすれば、もっと低学年も喜んでくれそうだね」など、次時に希望がもてるようなフィードバックをお願いします。

令和7年度 松本市立開智小学校
学び創造研究会 授業会場



Map of Matsumoto City, Japan, showing the city center and surrounding areas. The map includes labels for various landmarks, streets, and public facilities. A red flag with the number 8 is placed near the Matsumoto City Junior High School (松本市小中学校). Other notable locations include the Matsumoto Castle (松本城), Matsumoto Castle Park (松本城公園), and the Matsumoto City Office (松本市役所). The map also shows the surrounding areas of Maibara (美浜) and Maibara City (美浜市).



◆本校周辺は、交通量も多く、
一時停止、一方通行も多いです。
十分ご注意ください。

- 15 -